

花鳥諷詠詩

山口青邨

昭和の初め頃、高濱虚子が俳句は花鳥諷詠の文學であると言った。それ以来ホトトギス作家のモットーになってをり、ホトトギス派の作風を攻撃する人達は、常にこの言葉を用ゐて、なんだ、花に遊び、鳥に戯れて、そんな遊事が詩になるのかと言ふのである。どんなことか一應知っておく必要があらうと思ふので、少し解説をして置かうと思ふ。

虚子のいふことの概要は次の通りである。

花鳥諷詠の文學といふのは、春夏秋冬四時の遷り變りによって起る天然界の現象並にそれに伴ふ人事界の現象を諷詠する文學といふ意味である。

天然界の現象といふのは、例へば、春になると晦が咲く、櫻が咲く、桃が咲く、鶯が囀る、鳥が飛ぶ、草が萌える、土筆が生える、野山に霞がかかる——かういふことである。梅を探るとか、花見をするとか、桃の花を生けるとか、野遊びをするとか、土筆を摘むとか、蓬を摘むとか、蓬餅をつくるとか、三月の節句が来れば雛を祭るとか、白酒を飲むとかいふ類は自然界の現象に伴ふ人事界の現象である。これらは皆俳句の好んで材料とするところである。もっとも梅とか霞とかいふことは歌でも澤山詠まれてゐる、然し俳句では一層霞とか櫻とかいふものを深くこまかく詠ずる。土筆などといふ小植物になると歌の方では一つの添景物として詠ずるだけで、俳句のやうに専門に土筆を題材として詠ずることはない。俳句は和歌やその他の詩に對して天然の形象を詠ずることが非常に發達してゐると言つていい。

月雪花といふものは一般に詩歌の方にあつても大事な題材である、風雅の道を解するものは月雪花の趣を解するものとされてゐる、俳句に於てもこれは大事な題材である、しかし天然現象といふ上から見ると、月雪花も土筆も、落葉も皆同じ価値の一現象である。天然現象を吟詠する文學であるといふ立場から言へば月雪花も落葉も同等である。土筆が生えてゐる姿も落葉の大地にころがってゐるのも自然の生命が傳つてゐて何とも言へぬ面白味が存在するのである。

すべてこれらの現象を同一価値と見るのである。これらの諸現象をひっくりかえりて花鳥風月と云ふ文字で代表し、花鳥風月を吟詠する文學といふ言葉をも少し縮めて花鳥風月と四又字で表はし、他の詩との區別を判然とさすために俳句は花鳥諷詠の文學即ち花鳥諷詠詩と呼ぶのである。そこでこれは俳句は季題諷詠の文學であるといふのと同じ意味である。花鳥諷詠の文學である俳句は例えば落葉や土筆を吟詠することによって決して他の文學のあとにつくものではない、否、眞先になつて落葉や土筆を吟詠する独自の文學である。

山口青邨著『俳句入門』より一部抜粋